

# 新体操個人競技における演技構成と採点法に 関する一考察

—— 第15回世界新体操選手権大会(なわ・輪) ——

長 谷 川 洋 子

## I. は じ め に

1989年に国際体操連盟(Federation International Gymnastics 略称-F. I. G.)によって新体操の採点規則が大幅に改訂された。

女子の採点規則改訂の理由は、4年毎の定期的な改訂という理由だけでなく、選手の能力、技術の向上により年々技が高度化してきたため、以前の採点規則に即した審判法では最高得点である10点を頻繁に出さざるを得ない状況になってきたためであると考えられる。この改訂項目の中で特に大きな変化は得点配分で、従来10点満点から減点法のみで採点されてきたものが、9.5点満点とされ、残りの0.5点はボーナス点として加算される方式となった点である。

さらに1990年にはより正確で客観的な採点を目指す目的から、個人競技の審判員も団体競技と同様に、構成・実施の2つの審判団に分割される方式が提案され、F. I. G. 主催の国際大会において採用され始めている。また、ボーナス点についても細かい点に手が加えられた結果、構成の審判団は6.4点満点+ボーナス点0.4点の計6.8点で、実施の審判団は3.0点満点+ボーナス点0.2点の計3.2点という配点で採点するように改訂された。

このように厳密な採点がされるようになったため、審判に従事するものは今まで以上に採点規則(ルール)に精通する必要がある、高度な採点技術が求められ、審判の資質が問われるようになってきた。また、国際大会において高得点を得るためには選手の技術・能力の向上だけでなく、ボーナス点を獲得できるように、選手の個性を充分生かし強調し得る独創的な演技構成も求められる時代となってきている。

## II. 研 究 の 目 的

採点規則改訂後に初めて開催された世界選手権である第15回ギリシャ(1991年10月、アテネ)大会に参加した各国とも、改訂された採点規則をよく研究し、技の開発や高度化がなされていることが、各選手の演技構成にも表れていた。それに伴い、選手の徒手能力や手具操作技術の急激な向上も見られ、個人総合では最高得点である10点が2種目において延べ3回も表示された。これらはすべてソ連(大会参加時の国名)選手の演技に採点されたものであり、実際この10点満点は妥当であると思われた。その理由として、ソ連の選手はジャンプ力・柔軟性・キープ力などの点で参加した各国選手たちの中でもずばぬけた能力を持っており、さらに高度な徒手能力を生かした独創的な技も、構成中にふんだんに含まれているということが挙げられる。

さらにその構成が完璧に実施された時には、減点が無いというだけでなく、ボーナス点すべてを加点するのに適当であると考えられるからである。しかし、時として手具の乱れなど実施上にミスが見られたときには、徒手能力の高さや満点であると評価される構成にもかかわらず採点規則に則って減点が課される。これは新体操の採点上当然のことではあるが、ソ連選手に比べて基礎的運動能力または徒手能力が低いと思われる選手がミスなしで演技を実施した場合、順位が逆点してしまうことが往々にして見られたのである。採点規則によると、実施において必要とされるものの中に、スケールの大きさ・支点の制御・力動感や大きさなどが挙げられており、それらが欠けている時には、たとえミスなく実施された演技であっても当然減点されるものである。個人競技の採点が構成・実施に分かれたことで、より一層正確に採点するという配慮がされているだけにこの点は重要であろう。

これらのことから、選手の実施ミスの有無のみにとらわれない採点をするためにも、審判員の採点技術・資質の高さが必要とされてきていると考えるものである。

そこで、本研究は第15回世界新体操選手権大会の上位選手の演技構成および実施を比較するとともに、競技会において実際に採点された得点を参考にし検討することにより、審判員としての採点技術を高めるための指針となる資料を得ようとするものである。これに伴い、高得点につながる演技構成法や実施法について考察できればと思い本研究に取り組んだ次第である。

### Ⅲ. 研究 方 法

#### 1. 分析対象選手

第15回世界新体操選手権大会個人総合競技において上位入賞した、ソ連(URS)・ブルガリア(BUL)の各2名の選手、計4名を分析対象とした。

〈URS〉・アレキサンドラ ティモシェンコ (Alexandra TIMOCHENKO)

・オクサナ スカルディナ (Oksana SKALDINA)

〈BUL〉・ミラ マリノバ (Mila MARINOVA)

・クリスチナ シェケロバ (Kristina SHEKEROVA)

表 1 第15回世界選手権大会の個人総合競技成績

順位	選 手 名	国 名	な わ	輪	ボール	こん棒	合 計
1	オクサナ スカルディナ	URS	10.000	9.800	9.775	10.000	39.575
2	アレキサンドラ ティモシェンコ	URS	10.000	9.750	9.900	9.800	39.450
3	ミラ マリノバ	BUL	9.750	9.800	9.900	9.700	39.150
4	クリスチナ シェケロバ	BUL	9.750	9.650	9.725	9.750	38.875
5	イリナ デレアヌ	ROM	9.700	9.650	9.600	9.650	38.600
6	モニカ フェランデス	ESP	9.525	9.550	9.500	9.475	38.050

表 2 第15回世界選手権大会の種目別競技成績

順位	選 手 名	国 名	な わ			選 手 名	国 名	輪		
			構成	実施	合計			構成	実施	合計
1	A. ティモシェンコ	URS	6.800	3.175	9.975	A. ティモシェンコ	URS	6.800	3.200	10.000
2	K. シェケロバ	BUL	6.800	3.000	9.800	M. マリノバ	BUL	6.800	3.175	9.975
3	O. スカルディナ	URS	6.800	2.925	9.725	O. スカルディナ	URS	6.800	3.150	9.950
4	I. デレアヌ	ROM	6.750	2.925	9.675	K. シェケロバ	BUL	6.750	2.975	9.725
5	M. フェランデス	ESP	6.750	2.900	9.650	C. アセド	ESP	6.700	2.900	9.600
6	M. マリノバ	BUL	6.750	2.875	9.625	M. サンサリドゥー	GRE	6.700	2.875	9.575

## 2. 分析方法

第15回世界新体操世界選手権大会種目別決勝競技（なわ・輪）で実施された演技を収録したビデオテープをもとに次の点について分析した。

- (1) 徒手要素別の難度数および演技時間の計測
- (2) 手具の諸要素および操作方法別実施数
- (3) 演技移動図（演技面上での移動を演技開始点Sから終了点Fまでを $\frac{1}{400}$ に縮小し図示）
- (4) 高級難度の配置（実施した高級難度を、演技移動図上に明示し、さらに徒手の要素別の記号で表す）

表 3 徒手要素の難度別記号

徒手要素	中級難度 (DM) Medium Difficulties	高級難度 (DS) Superior Difficulties	超高級難度 (DSS) Super Superior Difficulties
ジャンプ	Λ	Λ <sub>s</sub> M DMジャンプ2連続	
バランス	T	T	T <sub>s</sub> DSバランスと 他のDSバランスの連続
ピボット	⊙ 1回転 (360°)	⊙ <sub>s</sub> DSピボット1回転 ⊙ 2回転 (720°)	⊙ <sub>s</sub> DSピボット2回転 ⊙ 3回転 (1080°)
柔軟	MGキック もぐり回転 その他の柔軟	MGキック もぐり回転2連続	
組合せ (例)		T <sub>s</sub> DMバランスと DM-MGキックの連続 DMバランスと 1回転ピボットの連続	T <sub>s</sub> DSバランスと DS-MGキックの連続 2回転ピボットと DSバランスの連続

## IV. 結果及び考察

### 1. 徒手要素別の難度数（表4）

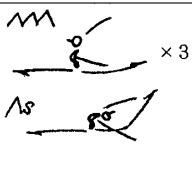
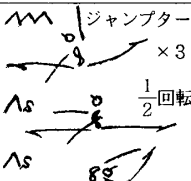
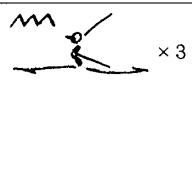
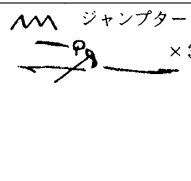
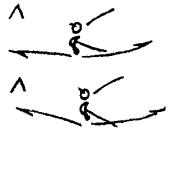
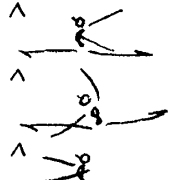
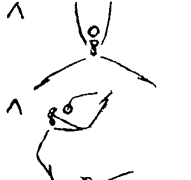
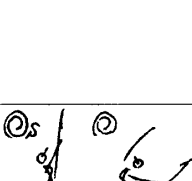
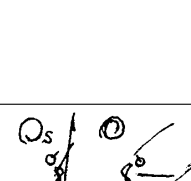

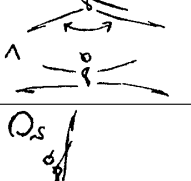
1989年に改訂された採点規則により演技構成に含まれなければならない難度等が明確にされた。高級難度4個、中級難度4個の数は変わらないが、高級難度のうち3つはジャンプ・バランス・ピボットで行うよう義務づけられたのである。また、以前に比べて難度のレベルが一段階引き上げられ、それまで中級難度として数えていたステップや両足でのターンは難度でなくなり、高級難度であった水平面以下の背面屈は、他の要素を組み合わせでの実施しないと高級難度と認めないようになったことなどはその一例である。

本研究で分析対象としたすべての選手の演技構成には、これらの規定の難度数は含まれていた。その中でも特に目を引くのはティモシェンコ選手（URS）の演技に含まれている超高級難度である。『なわ』の種目には1回、『輪』の種目には2回含まれており、この点だけを取っても他の選手より抜きん出ていることがわかる。また、ソ連の選手は2名ともジャンプ・バランス・ピボットでの高級難度以上のものをそれぞれ2回ずつ行っており、難度配分にも偏りが無い。難度の数だけを見ると、ソ連の選手が実施している難度の数とブルガリアのそれでは大きな差はみられない。ところが、『なわ』の手具操作に伴う難度合計数が14と同数であるティモシェンコ選手とマリノバ選手（BUL）の高級難度以上の価値の難度数を比較してみると、明らかな違いがみられる。このことは『輪』についても同様であるが、採点規則上では難度が規定数より少ない場合は減点されるが、多い場合には加算されないためこれだけでは点数に差はでない。

次にこれらの選手の間に差がみられるのは、『なわ』の種目におけるジャンプとピボットである(図I)。まずピボットの高級以上の難度数の比較では、1回の差だけだが、その種類でみるとティモシェンコ選手が脚の大きな動きを伴った2回転ピボット(超高級)とアチチュード2回転ターンというピボットの中でも難しい部類のものを完璧にこなしているのに比べ、マリノバ選手の高級難度は中級ピボットの4回連続という特例により難度の数を満たしているにすぎない。また、ジャンプの高・中級難度の質では、ソ連の選手は十分な柔軟性を生かしたジャンプを取り入れているが、ブルガリアの選手のジャンプにはあまり柔軟性は感じられない。

表4 徒手要素別の難度数

種目 選手名 難度	な												輪											
	A. ティモシェンコ			O. スカルディナ			M. マリノバ			K. シェケロバ			A. ティモシェンコ			O. スカルディナ			M. マリノバ			K. シェケロバ		
	DSS	DS	DM	DSS	DS	DM	DSS	DS	DM	DSS	DS	DM	DSS	DS	DM	DSS	DS	DM	DSS	DS	DM	DSS	DS	DM
ジャンプ		2	2		3			1	4		1	4		1	3		1	3		1	2		2	3
バランス		2			2			1	2		2			2	1		2			1	1		1	1
ピボット	1	1			2			1			1	2	2				2	1		1	1		2	1
柔軟		3	1		1	2			3		1			4	1		2				2			3
組合せ		1												1						1				2
合 計	1	9	3	0	8	2	0	3	9	0	5	7	2	8	5	0	7	4	0	4	6	0	7	8
	13			10			12			16			15			11			10			15		
手具操作に伴う難度数	1	9	4	0	8	3	0	4	10	0	2	6	2	7	5	0	7	3	0	5	4	0	7	8
	14			11			14			12			14			10			9			15		
準アクロバット	2			3			2			2			2			3			3			3		
演技時間	1' 28" 9			1' 28" 2			1' 24" 5			1' 20" 7			1' 25" 7			1' 26" 6			1' 17" 1			1' 27" 3		

		A・ティモシェンコ	O・スカルディナ	M・マリノバ	K・シェケロバ
ジャンプ	DS				
	DM				
	ピボット				

図I なわのジャンプ・ピボットの実施難度

さらに跳躍の推進力（ジャンプの幅）をみると、ソ連の選手はすべて大幅な移動を伴ったジャンプであるが、ブルガリアの選手のジャンプのうち大幅な移動を伴ったものは3連続ジャンプのみである。しかし、ブルガリアの選手のジャンプの種類は多彩で、跳躍の推進力の不足を変化・多様性で補っているようである。ジャンプについてソ連の選手に欠けているものは多様性であり、この点についてさらに工夫していけば一層すばらしい演技構成となるであろう。

跳躍時の柔軟性の差については前述したとおりであるが、単なる柔軟性についてはどうか。そこで柔軟性での高級難度の項目（MGキック、もぐり回転等）の数を比較してみると、『なわ』『輪』の難度を加算した数ではソ連の選手が7回・3回なのに対して、ブルガリアの選手は1回・0回と大きな差が出ている。

以上のことから今回出場したソ連の選手2名は、跳躍力・柔軟性・ピボットにおいてブルガリア選手よりも優れていることが推測できる。

## 2 手具の諸要素および操作方法（表5・6）

それぞれの手具には構成上必ずいなければならない要素が決められている。『なわ』の必須要素は、「なわとびでのステップのシリーズ」「なわとびでのジャンプ（3連続ジャンプを含む）」をそれぞれ3種類と「二重とび」などである。『輪』の必須要素は、「ころがし（床上での大きなころがしを含む）」「回し」をそれぞれ3種類、「左手での高級難度」1回および徒手の要素として「ジャンプ」を3種類である。以上の観点から4選手の構成内容を検討してみると（表5）、問題点は『なわ』の種目においてシェケロバ選手の「3連続ジャンプ」の不足（0.3減点<sup>1)</sup>）と、『輪』においてマリノバ選手の「ジャンプ」の回数の不足（0.1減点<sup>2)</sup>）・「ころがし」の回数の不足（0.3減点<sup>3)</sup>）とシェケロバ選手の「ころがし」の回数の不足（0.3減点<sup>4)</sup>）である。これらはすべてブルガリア選手の演技構成上の減点である。

次に手具の操作法に着眼してみると、『なわ』の種目においてマリノバ選手の「1本両手持ち」が演技時間の約半分を占めている上に、7回という他の選手に比べて少ない回数は長い間同じ持ち方が続くための変化性の乏しさにつながるのではないと思われる。その他の点については各選手とも工夫がみられ特に問題はないが、ソ連の選手の「足での操作」の項目はブルガリアの選手に比べて回数も時間も長い。これは手具の操作法に多様性・独創性を加えて構成されたもので、足での操作の上に難度も加え、高度な能力とテクニックを要するものである。この演技構成がすべてミスなく行われた場合には、高得点が期待できるものだと言えよう。

表5 手具の必須要素およびリスク別の実施数

		なわ				
要素	選手	A.T.	O.S.	M.M.	K.S.	
なわとび	ステップ	シリーズ	3	3	3	4
		二重とび				
	ジャンプ	3連続	1	1	1	
		単発	2	3	3	2
リスク		二重とび	1	1	1	1
		DS	1	1		1
		DM	1			2
		難度なし	2	3	3	
		ボーナス加点	0.2	0.2	0.1	0.2

		輪				
要素	選手	A.T.	O.S.	M.M.	K.S.	
ジャンプ	DS	1	1	1	2	
	DM	3	3	1	3	
ころがし	床上	2	2	1	1	
	体上	1	3	1	1	
ひねり回し	投げ	2	4	2	5	
	その他	3	3	1	3	
左手		DS	1	1	2	3
リスク		DS	1	1	1	1
		DM	1	1	1	3
		難度なし	1	2	1	1
		ボーナス加点	0.2	0.2	0.2	0.2

表6 手具の操作法別実施回数および時間（実施時間と全体に占める割合）

種目	選手			A. ティモシェンコ			O. スカルディナ			M. マリノバ			K. シェケロバ		
	実施数			回	秒	%	回	秒	%	回	秒	%	回	秒	%
なわ	もち方	一本	両片手	9	30"0	33.7	11	37"5	42.5	7	41"7	49.4	9	32"3	40.0
			手	3	5"0	5.6	6	12"8	14.5	3	5"9	7.0	3	5"6	6.9
		2本片手	2・3・4つ折	11	16"5	18.6	9	14"6	16.6	9	8"9	10.5	10	12"1	15.0
			その他	9	15"9	17.9	2	3"3	3.7	4	9"3	11.1	6	11"9	14.7
	投げ	その他	2	5"7	6.4	2	3"1	3.5	2	6"0	7.1	4	6"1	7.6	
			投	5	11"7	13.2	6	11"8	13.4	5	11"9	14.1	6	11"6	14.4
		足での操作	計	3	4"1	4.6	2	5"1	5.8	1	0"8	0.9	2	1"1	1.4
				42	88"9	100	38	88"2	100	31	84"5	100	40	80"7	100
輪	もち方	片手	13	39"2	45.8	13	39"9	46.1	15	37"2	48.2	16	45"8	52.5	
		両手	7	7"3	8.5	3	2"5	2.9	12	10"3	13.4	6	11"6	13.3	
		その他	3	6"0	7.0	0	0	0	5	7"7	10.1	0	0	0	
	投げ	ころがし	投	9	18"1	21.1	10	20"1	23.2	7	12"5	16.2	12	21"8	25.0
			3	7"9	9.2	5	10"0	11.5	2	4"6	6.0	2	3"7	4.2	
	足での操作	計	3	7"2	8.4	5	14"1	16.3	3	4"8	6.2	4	4"4	5.0	
			48	85"7	100	36	86"6	100	44	77"1	100	40	87"3	100	

### 3. 床面上での移動図

#### 1) 『なわ』の移動図（図Ⅱ）

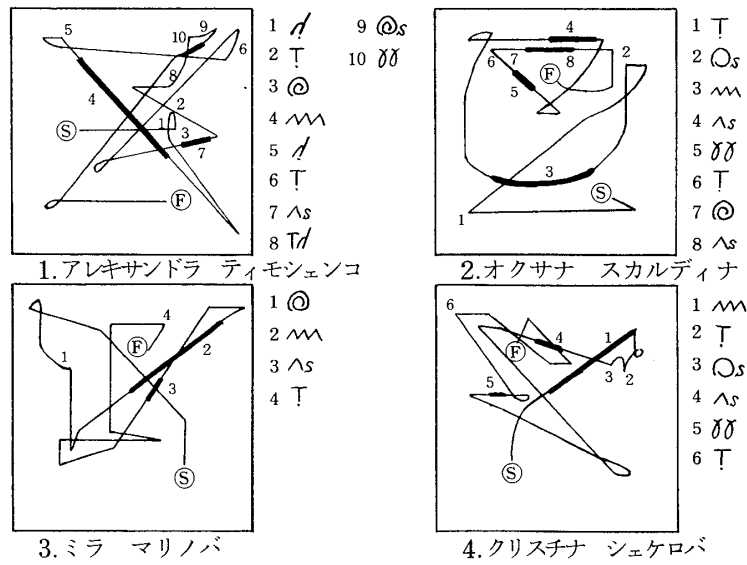
ティモシェンコ選手は移動の範囲が大きく、動線も長いことからスピーディーでダイナミックな演技であることが想像できる。スカルディナ選手は、全体の移動の距離としてはティモシェンコ選手に比べて短い滑らかな動線から、流れのある演技であると言えるであろう。ブルガリア選手の移動図にも工夫は感じられるが、フローア後方（図では下方）への移動が不足しているように思われる。

#### 2) 『輪』の移動図（図Ⅲ）

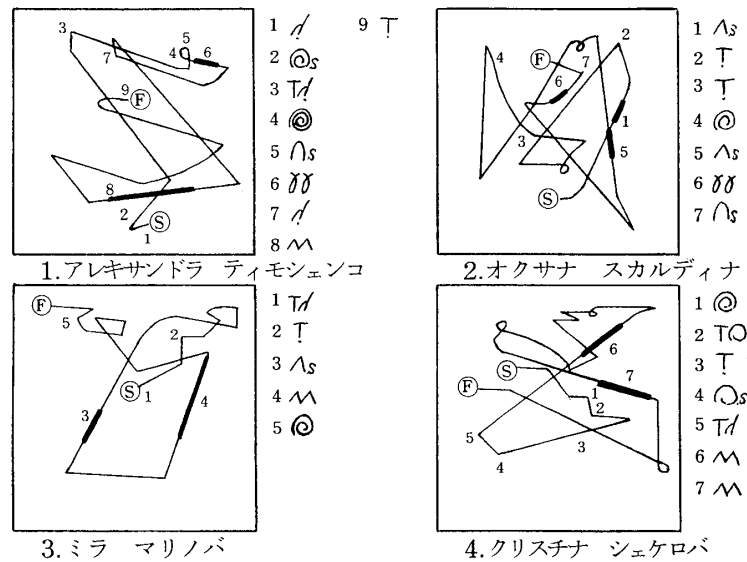
4選手ともフローア後方への移動が少なく、前面の審判員へに印象づけが強調されているように思われる。その中でもマリノバ選手の移動図は動線が短く単純で、ジャンプ以外の難度はすべて前半分のみで行われている点で「演技面の使用の偏り」として0.1～0.3の減点<sup>5)</sup>はやむを得ないのではないかと考える。

### 4. 採点について

1～3の項目についてそれぞれ分析・検討してきたが、すべてを考え合わせながら『なわ』『輪』の種目別1, 2位の選手の演技を採点規則に照らし合わせ、それぞれ減点・加点をした結果が表7である。この分析結果と実際に競技会で採点された結果とを比較してみると、1位に位置するティモシェンコ選手の得点には、『なわ』『輪』共に大きな差はなかった。しかし、2位に位置する選手の得点においては、大きな差が表れた。これは構成の審判団が、必須要素不足にもかかわらず減点をしなかったためと、実施の審判団が「ジャンプの大きさの不足」に対し、減点をするほどの欠点ではないと判断したためではないかと思われる。特にこの選手は新体操王国ブルガリアの選手であるため、審判団の先入観の中に必須要素が入っていないはずはないと思い込んだり、たとえ入っていないのではないかと考えても、競技会中では再確認することもできず、確信を持てないためではないだろうか。研究のように何度も繰り返して検討することで気がつく欠点を競技会中のそれもたった一回の演技をみて本質をつかみ、自信を持って減点できるようになるには、審判員も選手同様非常な熟練を要するものだと考えさせられる点である。



図Ⅱ 種目別「なわ」の移動図と高級難度の実施位置



図Ⅲ 種目別「輪」の移動図と高級難度の実施位置

表7 分析上の採点と競技会での得点の比較

項目 選手名		分 析 上 の 採 点						競技会での得点			
		構 成			実 施			合 計	構成	実施	合 計
		得 点	ボーナス点		得 点	ボーナス点					
			オリジナル	リスク		熟 練 度					
な わ	A. ティモシェンコ	6.4	0.2	0.2	3.0	0.2	10.000	6.80	3.175	9.975	
			6.8			3.2					
	K. シュケロバ	3連続ジャンプー0.3 6.1	0.2	0.2	ジャンプの大きさー0.1 ミスー0.1	0 2.8	9.300	6.80	3.00	9.800	
			6.5		2.8						
輪	A. ティモシェンコ	6.1	0.2	0.2	3.0	0.2	10.000	6.80	3.20	10.000	
			6.8			3.2					
	M. マリノバ	ジャンプー0.1 ころがしー0.3 フロアーー0.1 5.9	0.2	0.2	ジャンプの大きさー0.1	0	9.200	6.80	3.175	9.975	
			6.3		2.9						

## V. ま と め

今回研究対象にしたソ連選手は2名ともジャンプ・柔軟・ピボット・キープ力など、新体操に必要な能力の点ですばらしく、理想的な能力を持った選手であることを再確認した。これらの選手が個人総合優勝と種目別決勝での優勝すべてを独占したことは誰しも納得のいく結果であつたろう。しかし、ジャンプ・柔軟・ピボットなどの点で明らかに劣っているブルガリアの選手が僅差で後を追っていることは、まぎれもない事実であり、ソ連選手が僅かでもふらつきや手具の乱れなどのミスを犯すと簡単に順位が逆転してしまう位置にいるのである。アレキサンドラ・ティモシェンコ選手が個人総合において優勝できなかった理由も輪の種目でのミスのためであつた。

採点規則上では、難度については8回以上（高級4・中級4）を構成に含んでいけばよく、それ以上の難度を含んだからといっても特に採点に影響をおよぼさない場合もある。とはいえ、本研究で細かく分析していくにつれ、ティモシェンコ選手のピボットに満点を出すとしたら、能力的に低い他の選手のピボットには何点かの減点がされるべきではないか、その他ジャンプ、柔軟などの項目についても同様のことが言えるのではないか、など採点に疑問を感じ始めたのである。

しかし、理論だけでは割り切れないものが新体操の魅力でもある。ブルガリアの選手の堂々としたゆとりのある演技は、観客を魅了し感動させるような演技構成と実施なのである。ティモシェンコ選手の演技にはそのような強さが多少欠けることもあり、能力の高さにもかかわらず時としてもろい一面がでてしまうのである。つまり、高得点を得るためには、能力の高さに加えアピール性のある巧みな構成と実施の熟練性・表現力とが必要であると考えられる。

本研究を通して、新体操の本質を見極める難しさを改めて感じた。競技会中という限られている時間内にすべて見落としのないように、さらには要素の有無だけでなく質の高さを見極めなければならないのが審判員である。そして審判員が望ましいと判断した上位となった選手のあり方が、これからの新体操の進む方向であると示すことにつながるだけに、審判員の責任は大きい。それだけに本研究で検討した点を一つの資料として、実践を積み重ねることにより一層審判員の採点法について学んでいこうと思うものである。

## 参 考 文 献

1. 日本体操協会「新体操女子規則」 1990年
2. 国際体操連盟「Code of points」 1989年
3. 長谷川洋子「日本の新体操ジュニア選手の演技構成に関する一考察」 1988年 東京女子体育大学紀要第23号

## 引 用 文 献

- 1)～5) 日本体操協会「新体操女子規則」 1990年

（平成4年1月受付）